

2020年10月4日 司祭 越山 哲也

八戸聖ルカ教会

聖霊降臨後第18主日（特定22） 説教

「隅の親石」

〔旧約聖書〕 伊^ヤ書 5:1~7

〔使徒書〕 フィリ^ピの信徒への手紙 3:13~21

〔福音書〕 マ^{タイ}による福音書 21:33~43

主の平和が皆さんと共にありますように。

10月に入り、急に涼しくなってきました。季節の移り変わりを本当に早く感じます。教会の暦も聖霊降臨後の季節が残り約2か月となりました。教会暦は降臨節から始まります。降臨節は主イエス様の誕生を記念し祝うクリスマスの準備をする期間でもあります。同時に再びこの世に来られると約束されて天に昇られた主イエス様を待ち望むという信仰の目標を確認する季節でもあります。

教会暦は、降臨節～降誕節～顕現節～大齋節～復活節～聖霊降臨後の季節へと移りかわっていきます。教会暦の一番最後の主日は、王なるキリストが再臨され、この世のすべての破れ、不条理がキリストによって回復されるという神の国の完成へと私たちを導いていきます。したがって、1年間で私たちの信仰の目標を教会暦に従って生活していくことによって見失うことはないのです。

「目標を目指してひたすら走ることです。」（フィリ^ピの信徒への手紙3:14）と使徒書にあるように私たちの信仰生活の目標は神の国の完成であります。

教会暦は本当によく出来ているなど改めて思います。教会暦も1年の終わりに近づいてきましたので、緊張感のある福音書の箇所が読まれるようになっていきます。

本日の福音書は「ブドウ園と農夫」のたとえなしです。このたとえで出てくる農夫はまさに当時の指導的立場にあった律法学者たちを指します。主人とは神様です。神様は息子をブドウ園に送り込み、きっと敬ってくれるだろうと期待しますが、農夫たちは殺してしまったのです。

これはイエス様を十字架にかけて殺してしまったということです。主人（神様）はブドウ園（神の国）を完成させるために日々働かれて、私たちもその働きに招かれているのですがどうも私たちはその働きを妨害してしまっているようです。神の国のしるしは本当に小さなものであるとイエス様はこれまでも繰り返し繰り返し私たちに教えてくださいました。今日の福音書ではそのしるしは「隅の親石」で

あるとイエス様は語っておられます。神の国とは、神様が支配するまことに平和な状態であります。そこには不条理、差別、利己心、自己顕示欲などは一切取り除かれます。私たちが自分中心ではなく、お互いがまことに配慮し合って大切にされる世界が到来することを私たちは信じています。

そして、それはまだ完成していないけれど少しずつ完成に向かっているのです。

「隅の親石」とは私たちの命を、私たちの人生を陰ひなたとなって支えているものだと思います。ですから、よっぽど私たちが日ごろから意識しない限りそれは私たちが忘れてしまっているものです。自分が今こうして生きていることは「隅の親石」があるからなのだと私は思います。

聖歌418番を紹介します。パナナグータンと呼ばれるフィリピンの讃美歌です。「仲間」「友」という意味です。1節の歌詞は「誰もひとりだけでは生きてはゆけない 誰もひとりだけでは死んでもゆけない 皆それぞれお互いに応えあう 神さまに結ばれた者だから」です。

素敵な聖歌ですね。私は大好きです。

私たちは決して一人で生きているのではないのです。そして注目したいのは一人で死んでもゆけないのです。本来は死を迎える時も誰かの支えや見守りの中で死を迎えるのです。自ら命を絶つということはその意味からすると本当に悲しいことだと思います。

私たちはお互いに支え合わなければ生きられないのです。お互いが相手の「隅の親石」になりうる可能性を常に持っているのではないのでしょうか。神様は私たちに自由意志をお与えくださいました。

神の国の完成のためには「隅の親石」が決定的に必要なようです。日々の忙しさ、余裕がない日々であればなおさら「隅の親石」の存在は忘れてしまうでしょう。私自身自戒を込めてそう思います。

たとえ私たちが忘れたとしても神様は私たちを忘れることは決してありません。そして、必ず「あなた」のために今この時、隅の親石として「あなた」の事を思い、祈ってくださっている人がいることを私たちは生きる支えとしていきたいといます。